

新しい保育・幼児教育をめざして



遊びの質を高める保育

遊びの質を左右する要素って？

Photo: 東京学芸大学附属幼稚園 (小金井園舎) 中野 圭祐

榎原洋一

CRN所長。医学博士。お茶の水女子大学大学院教授。1951年生まれ。専門は小児神経学、発達障害。



最近の発達心理学研究によって、自発的な遊びは子どもの学びにつながるということが明らかにされています。今回の研究会では、研究者の講演と園の先生によるワークショップの後、両者が互いの立場を越えて「遊びの質を高める保育のあり方」について議論しました。子どもの遊びの質を左右する要素とは何か？議論の一部をご紹介します。

保育・幼児教育の現在と未来を考えるために研究者と園の先生が集まり、議論しました！

チャイルド・リサーチ・ネット (CRN) は、「遊びの質を高める保育のあり方」というテーマでイベントを開催しました。園種を越えた保育者同士の意見交換、保育者と保育・幼児教育の研究者との議論、研究者による講演など、盛りだくさんの内容の一部を紹介します。



園の先生によるワークショップ

公立・私立、幼稚園・保育所の枠を越えて保育者が集まり、「遊びが学びの保育」を実現するうえでどのような課題があるかについて、まず幼稚園グループと保育所グループに分かれ、後に全体で話し合いました。両グループに共通する課題、一方のグループが多く感じている課題を浮き彫りにし、その解決方法についても意見を交わしました。

「遊びが学びの保育」を実現するうえでの課題 (抜粋)

幼稚園グループ、保育所グループ共通	●若手の保育者の遊びに関する資質の低下。子どもの頃にあまり遊んだことがない保育者が増えている
幼稚園グループに多かった課題	●園全体の文化として、遊びを大切にしているか ●行事などが増える中で、子どもが十分に遊べているか など
保育所グループに多かった課題	●保育時間が長いと、保育者同士が子どもや遊びについて話し合う時間があまり取れない ●空間に制約があるため、食事や午睡をはさむと遊びが細切れになってしまい、連続性をもたせにくい など

研究者×園の先生の議論

ワークショップに出席した8名の保育者と5名の研究者とが、子どもの遊びの質とそれを高める方法について話し合いました。豊かな遊びを保證できる保育者の育成、遊びを通した学びを充実させるために重要な園長の資質、保護者や地域社会との連携の仕方など、さまざまな切り口から現状を分析し、遊びを中心とした保育を充実させる手立てについて論じました。具体的な提案や解決策が多く出され、遊びを中心とした保育を発展させ、その意義を社会に広げる上でとても示唆に富む議論になりました。

「もっと詳しく知りたい！」という方は、<http://www.crn.or.jp/ecec/> をご覧ください。また、下記もあわせてご覧ください。
 ・「CRN 活動レポート2013」Child Research Net <http://www.blog.crn.or.jp/about/publication.html>
 ・「これからの幼児教育」2014年度 夏号 ベネッセ教育総合研究所 <http://berd.benesse.jp/magazine/en/latest/>

講演

聖心女子大学教授
河邊貴子 かわべ たかこ



聖心女子大学文学部教育学科教授。
東京都公立幼稚園での勤務などを
経て、現職。

遊びは子どもの成長に大きく影響する

よく遊ぶことは、子どもの成長にとって重要な意味をもちます。ただ、子どもは初めから明確な目標をもって遊ぶわけではありません。遊びの対象とかかわるうちに、どうすればもっと面白く遊べるかを考え、次第に見通しをもって遊びを展開させていくのです。これは、いわば「混沌」の中に「秩序」をつくる営みであり、「学び」そのものだと言えるでしょう。だからこそ、子どもは遊ばば遊ぶほど能動的な学び手として成長し、その後の成長を支える土台が作られていくのです。

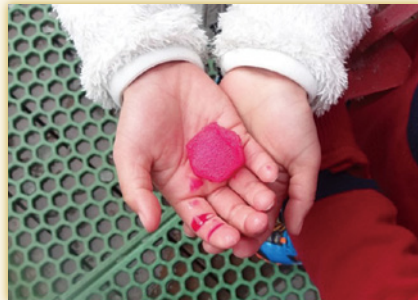
子どもは、面白い遊びであれば自分から進んで取り組もうとします。そのため、子どもの主体性を伸ばすには、随時、遊びに新奇性を取り込み、より面白くするプロセスが欠かせませんが、これを子どもの力だけで行うのは難しいでしょう。そこで必要になるのが、保育者による援助です。保育者には、遊びが保育・幼児教育の中核であり、遊びの質を高めることが子どもの発達を促すという認識をしっかりと持っていただきたいと思います。

遊びの志向性の延長に 援助の可能性を見出す

子どもの遊びを保育者がどのように援助すべきかを考えるために、神奈川県私立幼稚園での例をご紹介します。

ある大雪の日に、私がおその幼稚園を訪問すると、たくさんの子どもが園庭で雪遊びをし

ていました。園舎の玄関近くに置いてあるマットの穴につもった雪を見て、1人の子もが「マカロンみたいな形をしている！」と言ったのをきっかけに、一斉にマカロンづくりが始まりました。保育者は子どもの様子を見守っていましたが、ある子どもの「マカロン屋さんをしよう」という言葉を聞くと、絵の具を使うことを提案しました。そして、絵の具を手にとると、どの子どもも色付けに夢中になり、「これはストロベリー・マカロンね」などと遊びを展開させたのです（写真）。



また別の保育者は、かまくらづくりやソリ遊びをしていた子どもに、遊びに対するぼんやりしたイメージをはっきりさせる言葉をかけたり、技術的に難しいことを手助けしたりして、子どもが行いたいと思っている遊びを実現できるように援助していました。

この日は、ほかにもお城づくりや雪当てゲームなど、多様な遊びが行われました。保育者の適切な援助によって、子どもの遊びが豊かになった好例だと、私は考えています。

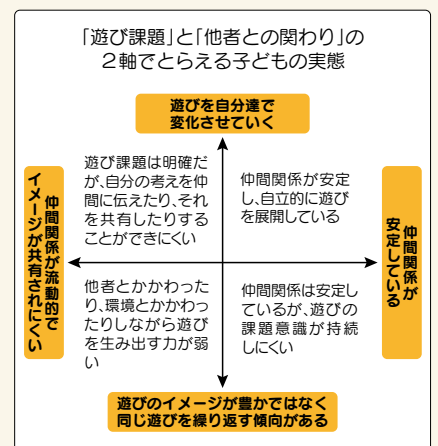
援助の仕方は 「まず大きく捉え、次に詳細に検討」

保育者は、援助の手立てをどのように講じればよいか。一にも二にも子ども理解が大切です。これについて、私が保育者として現場にいた頃実践していたことをご紹介します。

遊びへの適切な援助のための理解には、一人ひとりに対する個別理解と同時に、典型的な理解が必要です。典型的理解から説明しま

しょう。子どもの遊びを豊かにするのに必要な要素として「遊び課題」と「他者とのかかわり」の2つの軸を設定し、この2軸との関係によって遊びに対する子どもの実態を4つに分類していました（下図）。このような大づかみの理解と同時に、次のような視点で個別理解を深めて、具体的な援助の方向を考えます。①「目的意識の深化（自分のやりたいことができるか）」②「状況を再構成する力（遊びの面白さに向け、絶えず状況を作り直そうとするか）」③「環境へのかかわり（遊びに使うモノや場の必要性が分かり、能動的にかかわれるか）」④「情報の選択と自己決定（他者の動きを見たり、言葉を聞いたりして、自分の中にさまざまな情報を取り入れているか）」⑤「他者とのコミュニケーション（思いや考えを、他者にどう伝えようとしているか）」の5つの視点から検討し、援助の方向性を決めていました。

このように、大きく捉えてから詳細に分析するという方法を採用することによって、友達との関係が安定していない子どもに対しては積極的に手を差し伸べる、友達とかかわりながら遊ぶことに面白さを見いだしている子どもに対しては見守るというように、状況に応じて援助の仕方を変えることができました。子ども一人ひとりに適したやり方で、遊びの質を高められたと考えています。



河邊先生のスライド等をもとにCRNで作成

ECECとは？

ECECとは、Early Childhood Education and Careの略語で、直訳すると「人生初期の教育とケア」を意味します。チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)はECECを「新しい保育・幼児教育」を表すことばと位置付け、ECEC研究を進めております。※その他、ECCE、ECD等の用語で議論されることもあります。

編集後記



ECECの研究に取り組みはじめ、「日本の保育の課題と展望」、「Playful Pedagogy～遊びと学びの子ども学～」と題する研究会を二回開催し、そして、今回は「遊びの質」に焦点を当てました。河邊先生の講演から、「先生の動きかけで子どもの遊びが豊かになる！」ことに感動し、保育者の仕事に敬服しています。(劉愛萍)



子どもの成長にとって、遊びの質がいかに重要か。それを左右するのは保育者をはじめとする周囲の大人のかかわり方だと、今回のイベントを通して再認識しました。その責任を重く受け止めつつ、大人の方でも楽しみながら子どもたちとかかわっていけたらと思います。(小川淳子)

チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)の組織概要・運営体制
所長：榎原洋一（お茶の水女子大学大学院教授）／名誉所長：小林登（東京大学名誉教授、国立小児病院名誉院長）／
特別顧問：石井威望（東京大学名誉教授）／コーディネーター：劉愛萍 小川淳子（ベネッセ教育総合研究所）
所在地：〒206-0033 東京都多摩市落合1-34 ベネッセ教育総合研究所内

チャイルド・リサーチ・ネット(<http://www.crn.or.jp/>)は、(株)ベネッセホールディングスの支援のもとに運営されている国際的・学際的なインターネット上の「子ども学」研究所です。

Benesse®

CRN で 検索



発行日：2014年5月31日

ECEC04